

文教大学文学部日本語日本文学科蔵

「芥川龍之介自筆原稿」について

はじめに

神田祥子

本稿では、文教大学文学部日本語日本文学科が所蔵する芥川龍之介の自筆原稿について、その内容の紹介と決定稿との対応を中心に検討する。本学所蔵の芥川自筆原稿は、現時点で三十四点あり、「大導師信輔の半生」草群体、「忠義」草群体、「月評他」として分類されている。芥川の甥である葛巻義敏を通じて古書店に委ねられた草群体の一部と推定され、分売の際に、目録掲載のため分類が行われたものとみられる。本学所蔵資料の分類は現時点で概ねこれに従っている。

特定の作品に関連付けられた草群体ではあるが、他作品の草稿と見られるものも散見される。例えば「大導師信輔の半生」草群体には、「秋」「妙な話」などの初期作品の草稿や、比較的晩年の作品となる「少年」の草稿と推定されるものが混入している。また部分的に内容が連続する草稿もあるものの、多くは断片に留まっており、

最終稿と見られるものは存在しない。本論では、各草稿の翻刻および原稿の概要を示し、作品と草稿の実際の関連状況や、決定稿との対応を中心に分析を行うこととする。

本論では、芥川の作品として発表されたものについては、決定稿は原則として初出時の本文とし、初出が確認できなかったものについては、岩波書店版『芥川龍之介全集』（一九九五～九八）の本文および後記中の初出との異同を参照した。詳細については、草稿ごとに注記する。また、原則として決定稿の旧字は新字に改め、ルビは省略した。

なお各草稿は、①から④まで番号により分類し、翻刻については、以下の凡例に従って記した。

《翻刻凡例》

() 注記 () 削除 () 挿入

□ 行内空白 ■ 判読不能

旧字は適宜新字に改めた。草稿内では句読点が直前の字と同一マスに入れられ、次のマスが空白となっているが、この空白部分については省略した。また原稿用紙の行数に合わせ、行頭には行番号(㊦)〜(㊩)を付した。

一、「大導寺信輔の半生」草稿群に関して

この草稿群は、八枚の原稿用紙によって構成されている。うち、「大導寺信輔の半生」(「中央公論」大正十四年一月)との関連が指摘できるものは四枚にとどまる。残りは、「秋」(「中央公論」大正九年四月)の草稿二枚、「妙な話」(「現代」大正十年一月)、「少年」(「中央公論」大正十三年四〜五月)の草稿各一枚と考えられる。

a 「秋」関連稿について (㊠)㊡

「秋」の関連稿と推定されるものは二枚含まれ、いずれも青色枠線の四百字詰め原稿用紙を半切し、右半分を使用している。黒系のインクが用いられ、筆跡はやや太字である。

また、無地の台紙が裏打ちされており、㊡は原稿用紙を切断した際に欠損したマスの目が鉛筆で台紙に補われて

いる。㊠は、上から数マス分の原稿用紙が別途貼り込まれている(一行目および五行目)。

【翻刻㊠】

㊠ □□□□な(?) 作家だ? (この行は別紙貼り込み)
(三行分空白)

㊡ 「その(この行は別紙貼り込み)

㊢ □□彼は東京の高商にゐた時分から、——今は大

㊣ 阪の或商事会社に勤めてゐるが——堅人とし

㊤ て通つてゐた。勿論その堅人と云ふ言葉の中

㊦ には、何時も善悪両様の意味が「暗に含まれて」含ま

れてゐるら

㊧ 「ゐ」(しかつ)た。が、兎も角も中等教育程「の」度

の倫理に照

【決定稿対応部分】

所が学校を卒業すると、信子は彼等の予期に反して、大阪の或商事会社へ近頃勤務する事になつた、高商出身の青年と、突然結婚してしまつた。(「秋」一)²

㊠㊡はともに、主人公・信子の夫についての描写部分であると考えられる。夫は一章から登場するが、決定稿では夫の人となり描写されるのは二章である。夫の人

柄を①では「堅人」としているが、この単語は決定稿には見られない。

「秋」の草稿は、別稿とされる「車中」なども含め、多数が現存しており、山梨県立文学館編『芥川龍之介資料集』³（以下『資料集』と表記）収録の「⁶「秋」（別稿）」にも、信子と夫の関係に関わるものが多くみられる。

このうち、『資料集』の分類「別稿¹⁷」⁴は、①の六行目から十行目の内容と類似する草稿となっている。「別稿¹⁷」にも夫を「堅人」とする表現があるが、当初は他の単語を書こうとして、訂正して「堅人」と表記している。一方で、①の九行目にある「暗に含まれて」は「別稿¹⁷」には見られず、削除の形跡もない。また十行目冒頭も「あたらしかつた」となっており、①が「別稿¹⁷」の別稿であることは間違いないが、どちらが先行するものであるかは判定できない。

【翻刻②】

- ①（十マス分切り取り）する結婚は、必しも不
- ②可能なものではなかった。彼は着実家の声名
- ③を擔つた上に、見た所も（他）（外）の独身者に似ず、
- ④常住身綺麗ななりをしてゐた。彼が人中に交

- ⑤つてゐ■と、帽子からも、地味な背廣■から
- ⑥も、或は赤皮の編上からも、何處か石鹼の匂
- ⑦に似た、清新な空気が快く発散してゐるやう
- ⑧であつた。この点でも彼は（家庭■）求婚者として、

（次）人

- ⑨（■）後に落ちる筈はなかつた。いや、現にこの一
- ⑩月ばかり、会社の上役が彼を見こんで、その

【決定稿対応部分】

実際身綺麗な夫の姿は、さう云ふ人中に交つてゐると、帽子からも、背広からも、或は又赤皮の編上げからも、化粧石鹼の匂に似た一種清新な雰囲気を放散させてゐるやうであつた。（「秋」二）⁵

また②については、『資料集』に収録された「秋」別稿（「車中」）にも、また「ほとんど完成稿に近い表現の見える草稿」⁶とされる「⁵、「秋」草稿」にも類似のものは見られない。ただ、「赤皮の編上」「石鹼」など、決定稿に採用された文章と同じ文言も見られる点や、家庭の外での夫の姿について言及する部分が「車中」には少ない点から、①より決定稿に近い草稿であると考えられる。

b 「妙な話」関連稿について ③

草稿は、青色枠線の二百字詰め原稿用紙一枚であり、左下に「十ノ廿 松屋製」のロゴがある（ロゴの「十」の部分は欠損している）。黒系のインクが用いられ、太字の筆跡である。

また補強用の台紙には仙台周辺の旅行日程が記載されているが、交通手段として昭和二十年代以後に走行していた特急列車「第一みちのく」等の単語がみられることから、台紙自体は芥川自身と同時期のものではない。

この旅程の続き部分は、「忠義」草稿（⑩）および「忠義」草稿群に分類された「東洲齋写楽」草稿の台紙としても利用されており（⑨）、三枚の草稿が整理された時期が近いことが推察される。

【翻刻 ③】

（五行分空白）

⑥ □ 或冬の夜、Mの奥さんは私にこんな話をし
て聞かせた。（十四マス分空白）

⑦ 「千枝子さんのお話ですがね。——あなたは千

枝子^えさんを覚えていらつしやるでせう。今は

⑧ 佐世保にいらつしやる。——ええ、ある海軍

【決定稿対応部分】

或冬の夜、私は旧友の村上と一しよに、銀座通りを歩いてみた。

「この間千枝子から手紙が来たつけ。君にもよろしくと云ふ事だった。」

村上はふと思い出したやうに、今は佐世保に住んでゐる妹の消息を話題にした。（「妙な話」）⁷

「妙な話」決定稿との対応は、冒頭部分にあたる。この草稿では、語り手「私」に「Mの奥さん」が話を聞かせるという設定になっているが、決定稿では「旧友の村上」から話を聞くことになっている。また決定稿では、話している場所（「銀座通り」）や「千枝子」が「村上」の妹であることが示されている。

「妙な話」の草稿も、『資料集』に「1」「妙な話」草稿」として二種六枚が掲載されている。⁵このうち③は「草稿2・1」に分類された冒頭部分と類似している。「草稿2・1」では、語り手は話を聞かせる側として設定されており、また「Mと云ふ海軍大佐」の妻から聞いた話を語る、という体裁になっている。「草稿1・1」では決定稿と同様に、語り手に「村上」が話すという設定となっており、③はこの二つの草稿の中間に位置するものと考え

られる。

また、角田忠蔵編『芥川龍之介自筆未定稿図譜』（大門出版、一九七一）。（以下、『図譜』と表記）にも「妙な話」冒頭の草稿が掲載されている。こちらは「Mの奥さん」が語り手に話を聞かせる設定となっており、③と共通する。

c 「少年」（少年続編）関連稿について（翻刻④）

原稿は、青色枠線の原稿用紙一枚を、右から六行分のみ切り取って（なお原稿用紙は一行目が上から十三マス分切り取られている）、同じ程度の大きさの無地の台紙に貼り付けたものを、さらに二百字詰め原稿用紙程度の大さきの無地の台紙に貼り付けてある。また切断された部分の枠線は、無地の台紙に黒鉛筆で書きこまれ、ロゴ部分などは残っていない。

黒系のインクが用いられており、ごく細い筆跡である。

【翻刻④】

- ①（十三マス分切り取り）彼は魚榮と云ふ
- ② 茶屋の二階に茫然と海を眺めつづけた。其處
- ③ へ一日を暮らしに來た彼の一家一族は男は獻
- ④ 羞を重ねたり、女は（十一マス分空白）

（二行分空白）

【決定稿対応部分】

彼は海へ張り出した葭簾張りの茶屋の手すりにいつまでも海を眺めつづけた。海は白じろと赫いた帆かけ船を何艘も浮かべてゐる。（「少年続編」一 海）¹⁰

「少年続編」決定稿との対応は、一章「海」冒頭部分にあたる。この草稿では、主人公・保吉が海を眺める「茶屋」に「魚榮」という固有名が与えられているが、決定稿では「葭簾張りの茶屋」とされるのみである。また決定稿では、この部分に保吉と同席する家族の描写はない。

d 「大導寺信輔の半生」関連稿について（翻刻⑤）

「大導寺信輔の半生」草稿は青色枠線を持つ二百字詰め原稿用紙四枚によつて構成されている。黒系のインクが用いられ、筆跡は細字である。

このうち、⑤⑥については、「松屋製」のロゴが入っていない。⑦⑧には「松屋製」のロゴが左下に入れられている（⑧についてはロゴの一部を含め紙の端が切断されている）。右下にSM印と、「B:1 10:::20」の表示がある。ただし、この右下の表示には（ ）の位置とロゴの有無に、以下のような相違がある。

(S M 印 B : 1) 1 0 : : : 2 0

「松屋製」のロゴがないもの (⑤⑥)

(S M 印 B : 1 1 0 : : : 2 0)

「松屋製」のロゴがあるもの (⑦⑧)

また⑤は、原稿用紙の裏にフランス語の文章が十九行にわたり鉛筆書きされている。ただし芥川の筆跡であるかどうかの判別はできず、葛巻義敏によるものという可能性もある。

内容は、冒頭四行が、十九世紀フランスの詩人・共和派議員として活躍したアルフォンス・ド・ラマルティエルの処女詩集『瞑想詩集 (Meditations poetiques)』所収「太陽賛歌 (Hymne au Soleil)」の26行目から29行目を書き写したものである¹⁾。五行目以降は、原典等が確認できないが、詩の内容に対する論評であると考えられる。翻刻については掲載を割愛する。

【翻刻⑤】

(七分分空白)

- ④分たぬ彼自身の魂をも発見した。更に又「自然」(本所)
- ⑨の町々を除けば、彼に自然を教へたのもやは

④り「本に違ひなかつた。」「少くと」彼は(七マス分空白)

【決定稿対応部分】

信輔はもの心を覚えてから、絶えず本所の町々を愛した。並み木もない本所の町々はいつも砂埃りにまみれてゐた。が、幼い信輔に自然の美しさを教へたのはやはり本所の町々だつた。

(「大導寺信輔の半生」一・本所) 1 2

【翻刻⑥】

(六行分空白)

④彼は小遣ひを貰ふ為に年とつた長州出身の叔

父(■)に山縣有朋の功業を話した。□□□□□□□□

(二行分空白)

【決定稿対応部分】

現に或晩秋の午後、彼は小遣ひを貰ふ為に年とつた叔父を訪問した。叔父は長州萩の人だつた。彼はことさらに叔父の前に滔々と維新の大業を論じ、上は村田清風から下は山県有朋に至る長州の人材を讃嘆した。

(「大導寺信輔の半生」五・本) 1 3

⑤は決定稿の第一章「本所」の二段落目冒頭に対応す

る。また、⑥については第五章「本」の一段落目末尾に対応する。いずれも、決定稿の方が詳細になっている。

一方、⑦⑧については、決定稿の続編部分とされる「厭世主義者」（未発表）の草稿であると考えられる。「厭世主義者」草稿については、『資料集』に「7（厭世主義者）」「大導師信輔の半生」関連草稿」として八種二十六枚の分類がされている¹⁴が、⑦については冒頭部にあたる草稿「1」の別稿、⑧については草稿「8」の別稿であると推測される。

【翻刻⑦】

（一行分空白）

- ㉑ □ 信輔は既に厭世主義者だった。厭世主義の
- ㉒ 哲学をまだ一頁も読まぬ前に既に厭世主義者
- ㉓ だった。彼の家庭は貧しかった。のみならず
- ㉔ 彼は病身だった。「この」従って又彼の前途も決して
- ㉕ 赫やかしいものではなかった。彼はかう言ふ
- ㉖ 「境遇」（運命）にいつも憎悪を感じてゐた。成程彼の
- 頭
- ㉗ 脳だけは「■」（彼）と同級の青年よりも多少鋭いのに
- ㉘ 違ひなかつた。が、（同時に）「彼の試（夢）みてゐ」
- た □ □ □ □

（一行分空白）

「厭世主義者」の草稿「1」については、『資料集』では十一枚の草稿が掲載されている¹⁵。このうち、未定稿⑦と類似する部分が含まれるものは、「1-1a」「d」、「1-16」の五枚であるが、より内容に重複が多いものは「1-1a」、「1-1b」、「1-1c」である。未定稿⑦の冒頭は、この三枚と一致する。

しかし三行目以降は、「彼の家庭は貧しかった」（『資料集』の草稿三種は、いずれも「彼の家庭は前にも挙げたやうにいつも貧困を免れなかつた」となっている）、「彼は病身だった」（『資料集』の草稿三種は「彼の健康は何かと故障を生じ勝ちだった」（「1-1a、b」）「彼の健康も絶えず病苦に悩み勝ちだった」（「1-1c」）となつている）とあるように、より簡潔な記述がなされる傾向にある。

【翻刻⑧】

（六行分空白）

- ㉙ 屈辱に近い生計だった。しかし彼は生（を享け）（まれ
- て）
- ㉚ 「たからは」（来たど）（来た上は）（餬口しなければな

らなかつた。「■」生ま

⑨来て来た上は？——では又何の為に生まれ

⑩来て来たのであらうか？（十マス空白）

また「厭世主義者」の草稿については、『図譜』には一枚¹⁶、『資料集』では五枚（8 a s e）¹⁷の草稿が掲載されており、いずれも⑧の内容と類似する。ただ、これらの草稿がほぼ二行程度であるのに対し、⑧は四行に及び、後半の「生まれて来た上は？——では又何の為に生まれて来たのであらうか？」の部分については、『図譜』『資料集』の草稿中には見られない。

冒頭の「屈辱に近い生計だつた。」の部分は他の草稿とも共通するが、次の接続詞が「しかし」であるものは『資料集』では草稿「8 a」のみであり、また「餓口」という言葉については、草稿「8 c」の「彼は口を餓する為には」という部分と共通する。

二、「忠義」草稿群について

「忠義」（『黒潮』大正六年三月）関連稿は、原稿用紙十一枚から構成される。大半が四百字詰め原稿用紙を半

切したものであるが、一枚のみ全型のものが含まれている（⑭）。枠線は青色で、左半分が使用されたものには、「十ノ廿 松屋製」のロゴが含まれる。ただしロゴ部分を含む左端が切り取られたものが一枚あり（⑮）、「忠義」関連稿に使用された原稿用紙は全て同一の可能性が高いものの、確定はできない。また随筆「東洲齋写楽」（未発表）の草稿が一枚含まれている（⑰）。

また、全て黒系のインクが用いられ、筆跡はやや太字である。

a 「忠義」関連稿について（翻刻⑨～⑰）

「忠義」の関連稿のうち、決定稿の第一章「一 前島林右衛門」に関わるとみられるものは八点（⑨～⑰）、また第二章「二 田中宇左衛門」に関わるとみられるものは二点（⑰⑱）である。翻刻を以下に示し、決定稿との対応状況を確認する。

【翻刻⑨】（原稿用紙右半分）

- ⑨を当人の我儘だと解釈したの「も」は□決して無理
⑩ではない——「不幸にも」遺憾ながら□家老の前島
林右衛門
⑪も□かう信じて疑はない一人であつた。□□

④ □そこで □林右衛門は □機会さへあれば □修理を切諫した。「さう短慮では」「病気が本復した以上は □近々

⑤ 式日に (■) 御礼登城をする必要 ■する □その時殿中で □同列の旗本仲間は勿論 □諸大名へ対して □無礼な事でも云つたら □どんな騒動が ⑥ 始まるかわからない。股鑑 (は) 遠からず □ □ □ □の刃傷にある」と云ふのである □ □ □ □

【翻刻⑩】(原稿用紙右半分)

① 孝行 (の奨励) で □形式から云へば忠義 (の表白) である。林右衛門は □日 (毎) 夜にこの諫言を繰返し ② て □少しも倦む事を知らなかつた。殊に □修理 (すると □ここに) は □病気が本復した以上 □近近 □式日には ③ 登城しなくてはならない。(断つて置くが □當時の医師は □神経衰弱を以て) もし □ □ □ □ (四行分空白)

【決定稿対応箇所】

林右衛門は、修理の逆上が眼に見えて、進み出して以来、殆夜の目も寝ない位、主家の為、心を煩はした。——既に病気が本復した以上、修理は近日中に病緩の御礼として、登城しなければならぬ筈である。

所が、この逆上では、登城の際、附合の諸大名、座席同列の旗本仲間へ、どんな無礼を働くか知れたものではない。万一それから刃傷沙汰にでもなつた日には、板倉家七千石は、その儘「お取りつぶし」になつてしまふ。股鑑は遠からず、堀田稲葉の喧嘩にあるではないか。18。

草稿⑨⑩は、第一章で、家老の前島林右衛門が主君・修理の性情について懸念する部分にあたりとみられる。

なお、⑩については前述したとおり、「妙な話」草稿の台紙の続きにあたる旅程表が台紙部分に印刷されており、草稿が補強された時期が近いと考えられる。この台紙部分の続きは、⑩の台紙部分となっている。

またこの部分は『資料集』では、「1「主従」(忠義) 関連草稿」として分類されている資料二種十一枚のうち19、草稿「1、3」(「一、前島林右衛門」の草稿と見られるもの)とも類似する点が多く、特に⑨は大半の部分が重複している。ただし、⑨では林右衛門が修理に「切諫」したと思われる内容が「で示されているのに対し、草稿「1、3」は、この部分を決定稿と同様、林右衛門の視点に立った語り手の説明的叙述としている。

【翻刻⑪】（原稿用紙右半分、七行目以降切り取り）

- ①である。生きて不忠の賊となる位なら□死んで忠義の鬼となつた方がいい」林右衛門は又
- ②かうも思つた（十四マス分空白）
- ③□しかし□彼は四五日前に苦諫をすすめて□
- ④（危く）修理に手打ちにされやうとした事を思ひ出し
- ⑤た（十九マス分空白）

【翻刻⑫】（原稿用紙右半分）

- ①何気なく平伏してゐた頭をあげて□主人の方
- ②を見ると□修理はその拍（■）子に□「主に手向ふか」
- ③と云ひざま□後にあつた刀を（七マス分空白）

【決定稿対応箇所】

だから、林右衛門は、爾来、機会さへあれば修理に苦諫を進めた。が、修理の逆上は、少しも鎮まるけはひがない。寧ろ、諫めれば、諫める程、焦れば焦れる程、眼に見えて、進んで来る。現に一度などは、危く林右衛門を手討ちにさへ、しようとした。「主を主とも思はぬ奴ぢや。」本家の手前さへなくば、切つてすてよ

既に怒りばかりではない。林右衛門は、そこに、又消し難い憎しみの色をも、読んだのである。²⁰

草稿⑪⑫については、決定稿においては場面として連続する部分にあたるとみられる。決定稿では林右衛門の葛藤は、「家」の前途を念頭においてのものになっているが、⑪において、まずは自分の忠義心の有り様に即している。また⑪の後半および⑫は、諫言を繰り返す自分を、怒つた修理が手討ちにしようとしたことを、林右衛門が思い返す場面となっている。決定稿では修理が実際に刀に手をかける場面は省かれているが、草稿の段階ではその場面を描写する意図があつたことがうかがえる。

【翻刻⑬】（原稿用紙右半分）

- ①ばな（■）らない。（十四マス分空白）
- ②□しかし□処置となると□林右衛門も違つた。
- ③第一□諫言（十五マス分空白）

【翻刻⑭】（四百字詰め全形、「松屋製」ロゴあり。）

- ①としては□先祖の祭を（■）絶するより□（大■）不孝の
- ②大いなるはない。従つて人臣の分としては□

- ③ 「主」その君の□□を危くするより□不忠の大いな
 ④ するはない。この大不忠の賊とな「らん」るよりは□
 ⑤ 寧□「刀鋸鼎鑊」■（十三マス分空白）
 （右五行分空白）

原稿用紙左側十行分空白）

【決定稿対応箇所】

その名家に、万一汚辱を蒙らせるやうな事があつたらば、どうしよう。臣子の分として、九原の下、板倉家累代の父祖に見ゆべき顔は、どこにもない。²¹

⑬⑭は、⑪⑫に続いて林右衛門の葛藤を描写する部分と対応するとみられる。⑬については、決定稿の段階で明確な対応箇所は見当たらない。⑭については、板倉家の前途を憂い、修理の隠居を画策する林右衛門の心情描写と類似している。

【翻刻⑬】（原稿用紙左半分、右の一行目半分切り取り）

- ① 任じてゐ「る所があつた」た様であつた（十マス分切り取り）

- ② 忠義とは□君徳を完うする義に外ならない。
 ③ 君徳を完うする（十二マス分空白）
 （七行分空白）

【決定稿対応箇所】

成程、林右衛門は、板倉家を大事に思ふのかも知れない。が、忠義と云ふものは、現在仕へてゐる主人を蔑にしてまでも、「家」の為を計るべきものであらうか。²²

⑮は⑭の後に、主君の修理が、林右衛門の計画を知つて激怒する場面对応するとみられる。決定稿で「忠義と云ふものは」から始まる「忠義」の定義は、修理の視点に立って、主君の側から家臣に望む「忠義」のあり方を示している。

草稿にある「忠義とは君徳を完うする義に外ならない」の記述も、「忠義とは（主君が）君徳を完うする（ことができるように家臣が尽くす）義」であるという、決定稿と同様の修理視点からの記述であると考えられる。しかし一方で「忠義とは（家臣のために主君が）君徳を完うする」べきであるという文脈にも解釈でき、この場合は林右衛門の視点に立った記述であるともいえる。

【翻刻⑯】（原稿用紙左半分）

- ① □屋敷を出ると□日は一切の紛紜を知らない

- ㉒ やうに□路を照へらしてゐた。どこかの横町から
 ㉓ は□気の長い飴屋の「■」笛の音さへ聞えて来る□
 ㉔ 林右衛門は□妻子と家来とに困へまゝながら□□
 ㉕ □の槍を小脇にして□もう一度□出て来た屋
 ㉖ 敷の方を「見」振返つた。屋敷の「土」門と土塀と瓦屋

㉗ 根へとは□昔も（今も）変りなく□寂然として日の光の中

㉘ に眠つてゐる。（十四マス分空白）

㉙ □林右衛門「■」は暗然として□頭をめぐら「すと」した。

㉚ 「すぐに颯で」それからすぐに□一同へ「行け」と（颯で）差図をした。□□

【決定稿対応箇所】

そこで、彼は、妻子家来を引き具して、白昼、修理の屋敷を立ち退いた。作法通り、立ち退き先の所書きは、座敷の壁に貼つてある。槍も、林右衛門自ら、小脇にして、先に立た。武器を担つたり、足弱を扶けたりしてゐる若党草履取を加へても、一行の人数は、漸く十人にすぎない。それが、とり乱した気色もなく、つれ立つて、門を出た。

延享四年三月の末である。門の外では、生暖かい風

が、桜の花と砂埃とを、一つに武者窓へふきつけてゐる。林右衛門は、その風の中に立つて、もう一度、一応往来の右左を、見廻した。それから槍で、一同に左へ行けと相図をした。²³

草稿⑯は一章の末尾で、修理の怒りを買つた林右衛門が、屋敷を出奔する場面と対応しており、『資料集』の草稿「1・9」二行目以降と類似する。ここまでが決定稿の一章に対応する部分である。

【翻刻⑰】（原稿用紙右半分）

- ㉑ □「早速討手をかけやうかと存じた「所」が□止め
 ㉒ る者があつて□やめに致した。命冥加な奴で
 ㉓ ござる」（十七マス分空白）
 （七行分空白）

【翻刻⑱】（原稿用紙左半分。ロゴ部分を含め、左端は切り取られている）

- ㉔ だ佐渡守の耳にはいる程□話が熟さない内に
 ㉕ 中止されてしまったのである。（六マス分空白）
 ㉖ □修理は□佐渡守が眉を蹙めたのを見ると□
 ㉗ 愈□顔色が變つて来た。林右衛門と云ふ名を
 ㉘ 聞いただけでも□忘れてゐた不快の情が又□

- ⑥ むらむらと頭をもたげる。それも外の人の口
- ⑦ から□この名を聞いたのではない。「■」林右衛
- ⑧ 門が□自分を隠居にへして、家督をその人の次男に
- ⑨ 譲らせやうとした□佐渡守の口から聞「■」いたので
- ⑩ ある―加之□修理の心には□前から□この■

【決定稿対応箇所】

そこで安心して、暫く世間話をしてゐる中に、偶然、佐渡守が、何時ものやうに前島林右衛門の安否を訊ねた。すると、修理は急に額を暗くして、「林右衛門めは。先頃、手前屋敷を駆落ち致してござる。」と云ふ。林右衛門が、どう云ふ人間かと云ふ事は、佐渡守もよく知つてゐる。何か仔細がなくては、妄に主家を駆落ちなどする男ではない。かう思つたから、佐渡守は、その仔細を尋ねると同時に、本家からの附人にさう云ふ間違ひが起つても、親類中へ相談なり、知らせなりのいは、穏でない旨を忠告した。所が、修理は、これを聞くと、眼の色を変へながら、刀の柄へ手をかけて、「佐渡守殿は、別して、林右衛門めを最負（ママ）にせられるやうでござるが、手前家来の仕置は、不肖ながら手前一存で計らひ申す。如何に当時出頭の若年寄でも、いらぬ世話はお置きなされい。」と云ふ口上であ

草稿⑭⑮は、決定稿の二章序盤部分に対応し、一回目の登城時に、佐渡守から林右衛門の出奔について質される場面である。特に⑮の「二行目については『資料集』収録の草稿「2・2」の原稿用紙左半分と類似しており、また三行目以降も草稿「2・2」の右半分と内容的には一致する。

b 「東洲斎写楽」関連稿について (⑭)

草稿⑭は、青色枠線の四百字詰め原稿用紙の右半分が使用されており、⑨～⑮までの「忠義」関連稿とほぼ同一のものと考えられる。また前述のとおり、③⑩の台紙として使われた旅程表の最終部分が台紙となっている。

【翻刻⑭】

- ① これより大なる不祥はない。彼等は「■」実に□
 - ② 後者「■対す」に与ふる嘲罵によつて□彼等の「瞭」暴を百世
 - ③ に傳「へ」ふると共に□前者に対する阿諛によつて
 - ④ □彼等の瞭を天下に標榜するものである。□
- (六行分空白)

随筆「東洲齋写楽」は決定稿としての公刊はされておらず、『資料集』には「⁹7「東洲齋写楽」草稿①」「⁹8「東洲齋写楽」草稿②」「⁹9（俗衆は芸術を理解しない）（「東洲齋写楽」関連草稿）」の三点が収録されている²⁵。このうち、「⁹8「東洲齋写楽」草稿②」に分類された七種十一枚のうち、「草稿②6・1」の九・十行目および「草稿②6・2」の一・二行目は、ほぼ¹⁹の内容と一致する。

¹⁹での修正が『資料集』の草稿に反映されている箇所もあるが、その逆となっている箇所も存在する。ただし¹⁹では五行目以降は空白となっており、「草稿②6・2」は三〜十行目まで文章が続いている点から考えれば、¹⁹が先行する草稿である可能性が高い。

三、「月評他」について

この草稿群は、十五枚の原稿用紙から構成される。また内容により、四種類に分類でき、「侏儒の言葉」（「文藝春秋」大正十二年一月〜大正十四年十一月）関連の草稿が一枚、選評「懸賞小品「春」と「犬に噛まれる」を選びて」（「電気と文藝」大正十年二月）関連の草稿が三枚、随筆「梅花に対する感情」（「中央公論」大正十三年二月）

関連の草稿が八枚、対応作品が不明の草稿が三枚となっている。

原稿用紙は、すべて松屋製の二百字詰め原稿用紙が使用されている。ただ、「梅花に対する感情」関連稿は橙色の枠線を持ち、その他は青色の枠線である。詳細は関連稿ごとに記述する。

a 「侏儒の言葉」関連稿について（翻刻②）

「侏儒の言葉」関連稿は、「松屋製」ロゴの入った青色枠線を持つ二百字詰め原稿用紙に書かれており、左下に「SM印 B:1」の表示がある。また三行目と四行目の行間部分（本文の「生涯同一」と同位置）に「年中」という語を書き入れて、削除した形跡がある。筆跡は原稿と同一と考えられる。また、黒系のインクが用いられ、筆跡は細字である。

【翻刻②】

- ① 箭たるを主張するよりも確かに尊敬に價して
- ② ある。□しかし椎の葉の椎の葉たるを一笑し去
- ③ るよりも退屈であらう。少くとも〔同〕（生涯同）
- ④ 一の歎（ば）を
- ⑤ 「（かり繰り返してみる）」（繰り返すことに倦まない）」

のは滑稽であると共に不
 ⑤道徳である。□我我をして子どものままごとのや
 ⑥うに、(十七マス分空白)
 (四行分空白)

【決定稿対応箇所】

椎の葉の椎の葉たるを歎ずるのは椎の葉の筈たるを主張するよりも確かに尊敬に価してゐる。しかし椎の葉の椎の葉たるを一笑し去るよりも退屈であらう。少くとも生涯同一の歎を繰り返すことに倦まないのは滑稽であると共に不道徳である。実際又偉大なる厭世主義者は渋面ばかり作つてはゐない。

(「侏儒の言葉」 椎の葉) 26

草稿②は、『侏儒の言葉』のうち、断章「椎の葉」の草稿であると考えられる。特に一行目から五行目冒頭までは、大半が決定稿と共通する。

b 「懸賞小品「春」と「犬に噛まれる」を選びて」

関連稿について(翻刻②③)

「懸賞小品「春」と「犬に噛まれる」を選びて」は、雑誌「電気と文藝」の懸賞小説募集の際の選評である。原稿用紙はすべて青色の枠線を持つ二百字詰め原稿用紙

で、「十ノ廿 松屋製」のロゴが入っており、SM印はない。また黒系のインクが用いられ、筆跡は太字である。

【翻刻②】

(一行分空白)
 ①□久保田君の「春」へには、平和な自然とその自然の裡
 ②に動いてゐる生死の波瀾との対照が、巧に描き
 ③出されてゐる。「その傍ら」と同時に又人間の残酷
 「■」へさへ「■」をも「筆」軽
 ④「を入れた手腕」々と描いたのは凡ではない。
 (八マス分空白)
 (五行分空白)

【翻刻③】

(一行分空白)
 ①□久保田君の「春」には、平和な自然とその自然の裡に動いてゐる生死の相との対照が、「■」巧に
 ②描き出されてゐる。と同時に又人間の残酷さ
 ③をも併せて描「いたのは」き得たのは愉快である。
 「その上」長田君
 ④「私はこの小品は■」の「犬に噛まれる」は、何よりも題材が力「強■」強

⑦い。(十八マス分空白)

(三行分空白)

【翻刻②】

(一行分空白)

⑧□選を終わりました。(十一マス分空白)

⑨□一等は久保田君の「春」です。この小品には、

⑩平和な自然とその自然の裡に動いてゐる生死

⑪〔■波瀾〕(■)「との対照が、■成巧」(とが)〔■

(巧)に描かれて〔■〕ゐま

⑫す。「慾を云へばもう一」と同時に又人間の残酷

さも、側面から器

⑬用に描かれてゐます。慾を云へばもう一層、

⑭春らしい自〔■〕然の描写にも力を入れて貰ひたか

⑮つたと思ひますが、兎に角今般の應募小品〔■〕

⑯中、これ程無難に出来上つてゐる作品は、一

【決定稿対応箇所】

選を終わりました。

一等は久保田君の「春」です。平和な自然、その裾に動いてゐる生死、それから人間の残酷性と云つたやうな物が、巧にこの作品には描きこなしてあります。作者の気稟も悪い気がしません。慾を云へばもう一層、春らしい自然の描写にも力を入れて貰ひたかつたと思

ひますが、兎に角今度集つた沢山の応募小品中、これ程無難に出来上つてゐる作品は、一つも外に見当りません。そこで一等に推しました。

二等は長田君の「犬に噛まれる」です。これは題材の新しいのが、まづ何よりの強味です。手腕は久保田君より劣りますが、何処か新鮮な書方の中に、若々しい力を感じるのには愉快です。²⁷

三枚とも、内容としては一等を獲得した久保田良平「春」の講評部分を中心となつてゐる。⑳については、二等の長田(名不明)「犬に噛まれる」に言及した部分も見られる。

決定稿と同様に、文体が敬体となつてゐるものは㉑のみである。冒頭の「選を終わりました。」から始まる形式も含め、㉒が最も決定稿に近い。また㉑と㉒については、四行目の「と同時に」のように㉑での修正が㉒に反映されている。

さらに、㉑三行目の「生死の波瀾」が㉒三行目で「生死の相」となり、㉒では「波瀾」「対照」が削除されて「生死とが巧に描かれてゐます」となり、決定稿では「平和な自然、その裾に動いてゐる生死、それから」という形になつてゐる。これらの点から、㉑が先行し、㉒、㉓の

順に修正がされていると考えられる。

○「梅花に対する感情」関連稿について(翻刻②③④)

「梅花に対する感情」関連稿はすべて橙色の枠線を持つ二百字詰め原稿用紙が用いられている。また枠外左脇下部に「十ノ廿 松屋製」のロゴと、枠外左下に「S M 印 B:2」が表示されている。黒系のインクが用いられ、筆跡は細字である。

【翻刻②】

(五行分空白)

⑥□予等は文芸の士なるが故に、如実に万象を

⑦観ざる可らず。少くとも予等を持たざ(■)る限

⑧り、何人も容易に(■)その美(九マス分空白)

(二行分空白)

【決定稿対応箇所】

予等は芸術の士なるが故に、如実に万象を観ざる可らず。少くとも万人の眼光を借らず、予等の眼光を以て見ざる可らず。²⁸

【翻刻⑤】

①づから独自の表現を成せり。(■)「君がゆくみち

②の長てをくりだたみ焼きほろぼさん天の火も
③がも」と云ひ、(十五マス分空白)

(三行分空白)

⑦□梅花は真に宛然たる「詠物詩選」の一(冊)(■)なり。

(三行分空白)

【翻刻⑥】

①づから独自の表現を成せり。「君がゆく(みち)(道)の

②長てをくりだたみ焼きほろぼさん天の火もが

③も」と云ひ、「木枕の垢や」(十マス分空白)

(七行分空白)

【決定稿対応箇所】

古来偉大なる芸術の士は皆この独自の眼光を有し、をのづから独自の表現を成せり。ゴッホの向日葵の写真版の今日もなほ愛翫せらるる、豈偶然の結果ならんや。²⁹

草稿④は冒頭部分に対応している。続く⑤と⑥は④に続く部分となっているが、「偉大なる芸術の士」の「独自の眼光」「独自の表現」の例として、『万葉集』巻十五・三七四五の狭野茅上娘子の歌が引用されている。また⑦

では内藤丈草の「木枕の垢や伊吹に残る雪」の句を引用し、すぐに削除している。この二つは、決定稿には登場していない。

一方で後続の芸術家が「独自の眼光」を持つことを困難にする、影響力のある先行の芸術表現の例として、決定稿では蕪村の「暮春」の句が用いられており、あるいはこの部分を想定しての引用であった可能性もある。

【翻刻⑦】

- ①たる事実なり。然れども独自の眼光を以てするは必しも容易の業にあらず。否、絶対に独自の眼光を以てするは不可能と云ふも遮げざし物
- ②は大力量の人は少時間はず、到底（五マス分空白）
（五行分空白）

【決定稿対応箇所】

こは芸術を使命とするものには白日よりも明らかなる事実なり。然れども独自の眼を以てするは必しも容易の業にあらず。（否、絶対に独自の眼を以てするは不可能と云ふも遮げざる可し。）殊に万人の詩に入ること、屡なりし景物を見るに独自の眼光を以てするは予等の

最も難しとする所なり。³⁰

草稿⑦は、決定稿において⑤⑥に続く部分と対応している。また三・四行目の「遮げざるべし」は、初出で「遮げざる可し」、初刊で「妨げざる可し」となっている。

【翻刻⑧】

- ①る柔媚の情を「■」（も）催さしむる「は」ことは事実（な）り。然
- ②れども「最も」〈梅花〉を見る毎に、まづ（七マス分空白）
（八行分空白）

【決定稿対応箇所】

梅花は予に伊勢物語の歌より春信の画に至る柔媚の情を想起せしむることなきあらず。然れども梅花を見る毎に、まづ予の心を捉ふるものは支那に生じたる文人趣味なり。³¹

草稿⑧は、決定稿において⑦に続く部分と対応する。ただし、「柔媚の情」の例として挙げられる部分の草稿がこの前に来ると考えられるが、その部分は本学所蔵資料には含まれない。

【翻刻⑳】

㊦ 山紫水明楼上の一簪を博せしやも亦知るべからず。且又彼等も超凡の才なり。豈彼等の芸術を道楽と「■」(への)二者を混同せんや。(五マス分空白)
 (以下七行分空白)

【決定稿対応箇所】

予をして当時に生まれしめば、戯れに河童晩帰の図を作り、山紫水明楼上の一簪を博せしやも亦知る可からず。且又彼等も聡明の人なり。豈彼等の道楽を彼等の芸術と混同せんや。^{3 2}

㊧と㊨の間には、決定稿では梅花が想起させる「文人趣味」を「道楽」として否定する部分書かれるが、この部分の草稿は、本学所蔵資料には含まれない。

【翻刻㉑】

㊩ 対する感慨を想へ。□更に又斯る美人にして偏に「愛す」べく(十五マス分空白)
 (以下八行分空白)

【翻刻㉒】

㊪ 対する感慨を想へ。更に(又)汝の感慨にして唯ほればれとするのみなりとせば、汝も畢に流俗のみ。済度す「■」(可)からざる乾屎槪のみ。□□□
 (以下七行分空白)

【決定稿対応箇所】

予の文に至らずとせば、斯る美人に対する感慨を想へ。実に又汝の感慨にして唯ほればれとするのみなりとせば、已んぬるかな、汝も流俗のみ。済度す可からざる乾屎槪のみ。^{3 3}

㊫および㊬は末尾部分と対応する。内容と加筆部分から、㊫が㊬に先行する草稿であると考えられる。また二つめの文の「更に」は初出では「実に」となっており、その後の初刊で「更に」に改められているため、初出の際に誤植があったものと考えられる。

d 対応作品不明稿について(翻刻㉓〜㉔)

その他、現時点では対応する作品が明確でない未定稿が三枚存在する。すべて青色の枠線を持つ、二百字詰め原稿用紙が用いられており、枠外左脇下部に「十ノ廿 松

屋製」のロゴと、枠外左下に「S M 印 B : 1」が表示されている。黒系インクが用いられ、筆跡は細字である。

【翻刻⑳】

(五行分空白)

- ㉖□「新」(若)緑を新緑とは云ふけれども、実際は必しも緑(のみ)ではない。寧ろ緑(■)(の)みではない所に新緑
- ㉗の美しさもある訳である。(ハマス分空白)
- (二行分空白)

【翻刻㉑】

(五行分空白)

- ㉘□若葉を新緑と云ふけれども、実際はどの木
- ㉙も同じ「時刻に」「時に」「時刻に」時に若葉になる次第では「ない」「■」「た」
- ㉚とへば初夏の東山を見れば、無数の緑の変化
- ㉛の中に薄(■)(赤)い一抹をも交(■)へてゐる。□
-
- (一行分空白)

【翻刻㉒】

(五行分空白)

- ㉜□若(■)(葉)を新緑と云ふけれども、実際はどの木

- ㉝も同じ時刻に一時に「若葉」(緑)になる次(■)(■)(第)ではな

㉞い。たとへば晩春の東山を見れば、無数の緑

㉟の変化の中に薄赤い一抹をも交へてゐる。「若

Ⓡ楓茶色になるもひと盛り」と云ふやうに、□□

すべて「若葉を新緑と(は)云ふけれども」から始まり、木によつて色調が変化する時期に差があることを述べている。未定稿内の内容の推移と加筆部分から考えると、㉚、㉛、㉜の順で書かれたものと推測される。

おわりに

以上、文教大学文学部日本語日本文学科が蔵する芥川自筆原稿について、その内容と作品の対応状況を示した。一つの作品に関連付けられる草稿もあるが、いずれも断片的であり、他に残存する草稿群との関連についてより詳細な比較検討が必要となろう。また原稿の整理された時期や状況、原稿の状態や芥川の執筆状況との関連など、今後精査すべき課題は多いが、それは別稿にて扱うこととした。

【注】

- 1 芥川未定稿群については高橋龍夫氏、庄司達也氏より多くのご教示をいただいた。
- 2 決定稿は「中央公論」35巻4号（大正九年四月）掲載の初出とした。引用部分は144頁による。
- 3 山梨県立文学館編『芥川龍之介資料集』山梨県立文学館、1993
- 4 3前掲、1巻・176頁
- 5 決定稿は2に同じ。引用部分は147頁による。
- 6 海老井英治「解説」（山梨県立文学館編『芥川龍之介資料集』山梨県立文学館、1993、3巻・18頁）による。
- 7 「妙な話」（「現代」大正十年一月）の初出は現存が確認できなかつた。引用は初刊『夜来の花』を定本とする岩波書店版『芥川龍之介全集』第七巻の本文（引用は163頁による）をもとに、石割透による「後記」の初出との異同を参照した。なお、「後記」によればこの引用部分に初出との異同はない。
- 8 3前掲、1巻・218〜219頁
- 9 角田忠蔵編『芥川龍之介自筆未定稿圖譜』（大門出版、一九七一）
- 10 決定稿は「中央公論」39巻5号（大正十三年五月）掲載の初出とした。引用部分は67頁による。なお、この部分のちに「少年」と統合され、第四章にあたる。
- 11 この未定稿にラマルテイーヌの詩からの引用が見られる点については、鈴木健司氏、Goujon Jonathan氏よりご教示をいただいた。
- 12 決定稿は「中央公論」40巻1号（大正十四年一月）掲載の初出とした。引用部分は創作245頁による。
- 13 決定稿は12に同じ。引用部分は創作255頁による。
- 14 3前掲、2巻・293〜297頁
- 15 3前掲、1巻293〜295頁
- 16 3前掲、74頁
- 17 3前掲、1巻297頁
- 18 決定稿は「黒潮」2巻3号（大正六年三月）掲載の初出とした。引用部分は28〜29頁による。
- 19 3前掲、1巻・98〜101頁
- 20 決定稿は18に同じ。引用は29ページによる。
- 21 決定稿は18に同じ。引用は30頁による。
- 22 決定稿は18に同じ。引用は31頁による。
- 23 決定稿は18に同じ。引用は33ページによる。
- 24 決定稿は18に同じ。引用は35ページによる。
- 25 3前掲、2巻64〜76頁
- 26 決定稿は「文藝春秋」2巻2号（大正十二年二月）掲載の初出とした。引用部分は1頁による。
- 27 「懸賞小品「春」と「犬に噛まれる」を選びて」は初出の現存が確認できなかつたため、引用は初出を定本とする岩波書店版『芥川龍之介全集』第七巻の本文（引用は247頁による）をもとに、石割透による「後記」の初出との異同を参照した。なお、「後記」によればこの引用部分に初出との異同はない。
- 28 決定稿は「中央公論」39巻2号（大正十三年二

3 3	3 2	頁	3 1	3 0	2 9	月
決定稿は	決定稿は	による。	決定稿は	決定稿は	決定稿は	掲載の初出とした。
28に同じ。	28に同じ。		28に同じ。	28に同じ。	28に同じ。	
引用部分	引用部分	は	引用部分	引用部分	引用部分	は
113頁による。	112頁による。		111頁・112	111頁による。	111頁による。	

(本学准教授)